「人間として生きる」とは

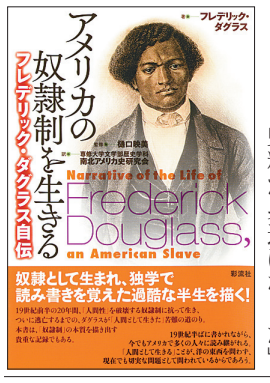
◀ アメリカ 奴隷解放活動家の自伝

文・樋口映美ゼミ　6年かけ翻訳

『人間として生きるとはどういうことか』を問いかけてくるこの本を多くの人に読んでほしい」

文学部歴史学科の樋口映美ゼミのメンバーが、19世紀のアメリカ合衆国（以下アメリカ）の奴隷解放運動活動家の半生をつづった自伝を翻訳、1月に出版した。タイトルは『アメリカの奴隷制を生きる―フレデリック・ダグラス自伝』（彩流社・本体1800円＋税）。

ゼミの先輩から後輩に受け継がれ、出版まで6年という労作。樋口教授の元には「アメリカ史の古典とも言うべき重要な史料が身近になった」



「読みやすく美しい日本語で書かれている」と読者から賛辞が寄せられている。

アメリカ東部メリーランド州に「奴隷」として生まれたアフリカ系アメリカ人フレデリック・ダグラス（1818～1895）は、艱難辛苦のなかで読み書きを習得し、「人間として生きる」ことを知る。

20歳で「奴隷」の境遇から、命がけで2度目の逃亡に成功。その後、解放運動に生涯を捧げた。1845年に世に出た本書には生い立ちから逃亡までが、「奴隷」たちや所有者のさまざまなエピソードとともに緻密に描かれている。

樋口ゼミのテーマは「アメリカ社会を歴史から考える」。アメリカの人種問題を考える上で、本書は「きわめて重要な自伝」（樋口教授）であることから、ゼミで2009年に史料教材として講読するとともに翻訳を開始。ゼミ生たちは熱心に取り組んだ。

ゼミ生には英語の得意・不得意もあったが、全員で話し合いを重ねて考察を深めた。翻訳作業と訳注は後輩に受け継がれ、14年秋に終了。その成果は、専修大学歴史学会の会誌『専修史学』に2010年から5回にわたって掲載されてきた。

15年春、まとめて出版する話が持ち上がり、本年度3年次生が中心となって全翻訳と全訳注を見直し、出版作業に取りかかった。新たに「訳者まえがき」と「訳者あとがき」、「索引」も加えた。

この翻訳プロジェクトに関わったゼミ生は卒業生も含めて52人にのぼる。

「信念を持って自由を求め続けたダグラスの不屈の精神。初志を貫徹した力強さ……その人柄や思いが詰まった自伝です」と語るのは朴洵利さん（文3）。副ゼミ長で本書をまとめるにあたって班長を務めた。

「正確な訳はもちろん、読みやすく仕上げることに気を配った」と振り返るのは、09年当初のゼミ生で卒業後もこのプロジェクトに関わり続けた畑山慎哉さん（平25文）。

労作が活字になった喜びは歴代ゼミ生全員が共有する。ゼミ長の小畑悟さん（文3）は「先輩から受け継いだ努力の成果が形になった。得がたい経験です」と話す。

▲ プロジェクトに参加した現ゼミ生の代表者たちと畑山さん（右端）

日本学術振興会16年度 特別研究員に2人内定

杣取恵太さん

坂本次郎さん

優れた若手研究者に研究奨励金を支給する日本学術振興会の2016年度特別研究員（DC1）に、本学大学院から2人が採用内定を得た。

内定を受けたのは、文学研究科修士課程心理学専攻2年次の杣取恵太（そまとり）さんと坂本次郎さん。指導教授は国里愛彦准教授。

特別研究員制度は、若手研究者に対して、主体的に研究課題等を選びながら研究に専念する機会を与え、研究者の養成・確保を図る制度。DC1は博士後期課程1年次相当に在学する者が対象で、採用期間は3年。研究奨励金と研究費が支給される。15年度のDC1の採用率は21・9％だった。

▼ 矢野学長（前列中央）と専大チームのメンバー

経済学検定試験大学対抗戦

専大チームが3連覇

経済学の習得度と応用力を客観的に判断する経済学検定試験（ERE）ミクロ・マクロ大学対抗戦で、専大チームが2015年中に開催された2大会を制し、通算で大会3連覇を果たした。また、個人成績では中村天平さん（文3）が2大会ともトップに輝いた。

EREは特定非営利活動法人日本経済学教育協会主催で年2回開催。対抗戦はミクロ経済学、マクロ経済学が対象で、各チーム上位成績者4人の合計点で順位を決定する。

7月に23回大会が、12月に24回大会が開催され、エクステンションセンター主催の公務員試験講座から計7チーム延べ50人が挑戦した。結果は、23回（全国7校13チーム89人参加）で経済学検定演習講座Aチーム（9人）が2位に500点の大差をつけて優勝。24回（12校28チーム188人参加）もハイレベルコースAチーム（8人）が制した。専大チームは14年の22回対抗戦も優勝しており、3連覇を達成した。

個人賞では中村天平さんを筆頭に、中村友哉さん（経営3）、古郡拓也さん（同）、山崎亮さん（経済3）がトップ4に食い込んだ。

両大会の優勝メンバーは2月19日、矢野建一学長に結果を報告。「今後とも勉強にいそしんでください」と激励された。

中村天平さんは「1年次生の冬からEREに挑戦しているが徐々に点数が上がっていくのが面白い」と笑顔。古郡さんは「EREがゴールではないが、自分の実力が目に見える形でわかるので自信につながる」と話す。

「明治期私立法律学校の連携と対抗」シンポ

専大など5大学 共同研究の成果を発表

明治時代の同時期に東京・神田に所在した私立法律学校をルーツとする本学などの大学史担当者が共同研究の成果を発表するシンポジウムが1月28日、神田キャンパスであった。学校の誕生から教育内容、各校の競争と協力など多角的な視点から実態に迫った。

シンポジウムは「明治期私立法律学校の連携と対抗」と題し、本学のほか法政、明治、中央、日本の5大学でつくる法律学校研究会などの主催。

私立法律学校は、1880（明治13）年に東京法学社（現法政大）と専修学校（現専修大）が開校。以降、85年までに創立された明治法律学校（現明治大）、東京専門学校（現早稲田大）、英吉利法律学校（現中央大）が五大法律学校といわれる。さらに89年には日本法律学校（現日本大）が開校。ほとんどが神田周辺に学舎を構えた。

法律学校研究会は、来歴が似ている各校の比較研究や史料の共有化などを目的に共同研究に着手。2013年、科研費の基盤研究に採択された。各大学が所有する明治時代の史料のデジタル化を進め、14年1月には共同で展示会を開催した。

シンポジウムでは本学大学史資料課の瀬戸口龍一課長（総務部次長）が五大法律学校の連携について報告。1888年には連合討論会が開催され、多くの観客を集め、雑誌も刊行された。「明治中期にこのような連携を可能にした学校群は法律学校以外になく、いかに社会的要請が高かったかを示す事例といえる」と指摘した。

また本学法学部の坂誥智美准教授が地方の法律学校の例として会津法律学校について基調講演した。

▲ 坂誥准教授による基調講演

『下流老人』著者 貧困問題を語る

社会学科専門入門ゼミ

高齢者、年金生活者の実態を明らかにした『下流老人』の著者、藤田孝典さん（NPO法人「ほっとプラス」代表理事＝写真）。人間科学部社会学科の専門入門ゼミ3クラスが合同ゼミを1月13日、生田キャンパスで行い、藤田さんから話を聞いた。参加したのは同学科（生活・福祉系）担当の宇都榮子、馬場純子、樋口博美各教授指導によるゼミ生。

1982年生まれの藤田さんは、大学在学中から生活困窮者をサポート。本年度後期に生田キャンパスで社会学特殊講義を開講、好評だった。

学生35人は事前に藤田さんの『下流老人』や『反貧困』（湯浅誠著）を講読、貧困について学んだ上で合同ゼミに臨んだ。

藤田さんは下流老人を▽収入が著しく少ない▽十分な貯蓄がない▽頼れる人間がいない、など「あらゆるセーフティーネットを失った状態」と定義。

「高額な医療費や介護費などの支出が発生すると想定外の貧困に陥る。高齢者の貧困は子ども世代の共倒れを招き、社会全体が貧困に覆われる。社会保障制度の抜本的改革など早急な対策が必要だ」と述べた。さらに「貧困は見えにくい。社会全体が貧困を考える意識改革も必要」と写真・データなどを示しながら提言した。

学生たちは興味深く聴き入り「社会保障制度の問題点を学ぶ有意義な授業」などの声が上がった。植田秀之さん（1年次）は「高齢者の貧困はあらゆる社会問題にリンクしている。日本は海外に比べ、デモなどで訴える行動が少ない。自分たちの問題として共有していく必要がある」と貧困問題を考える重要さを語った。